

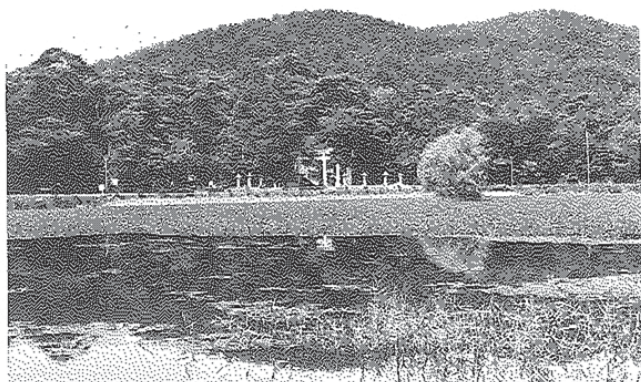


# 三島池のカモと生息地

## 三島池のはじまり

坂田郡山東町にある三島池がいつごろできたかについては、はっきりしませんが、坂田郡志によると1200年代の初めごろであろうと思われています。佐々木秀義が鎌倉幕府の創設を祈願しその願いがかなえられたので、相模国（今の神奈川県）の鶴ヶ岡八幡宮を勧請して三島神社を建立したのが元暦元年（1184）と記されてあります。また一説には、秀義の子孫にあたる佐々木重綱が伊豆の三島神社に祈請し、この地の太原庄を鎌倉幕府より与えられたので、三島の神を勧請し、前に大池を造ったともいわれています。また秀義がこの池を掘ったところ水が出てこなかったのを、これを神に占ったところ、一人の女を生きながらにして埋めると水が湧出するという水神のお告げで、秀義の乳母比夜叉御前が生きながら池底に入り埋まったところ、年中絶えることのない水が湧き出て来たという言い伝えもあります。そのときはた織り機と共に埋めたので、今でも深夜になるとはた織りの音が聞こえるとも言われています。近くに比夜叉の墓があり、歌碑も建てられています。

名にも似ず 心やさしき たおやめの  
誓も深く みつる池水



三島池と三島神社

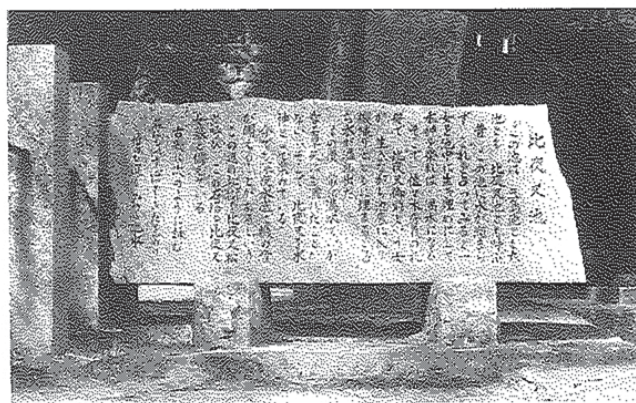
## 三島池の環境

三島池の由来は以上のようなのですが、実はこの池は伊吹山扇状地の南端にあたります。一般に扇端といわれるところは湧泉が多く、水田が開けて環境のよいところになっています。現在も、この付近は大へんよい地下水が出て来ますから、山東町の上水道の水源池になっていますし、付近各所でボーリングが行なわれ、飲料水、灌漑用水、工業用水などが地下からくみ上げられています。また北に清流姉川があって、三島池の水は主としてこの姉川から流入しています。またびわ湖との間には南北に連なる300mばかりの横山があって、この地はびわ湖岸から隔離されています。

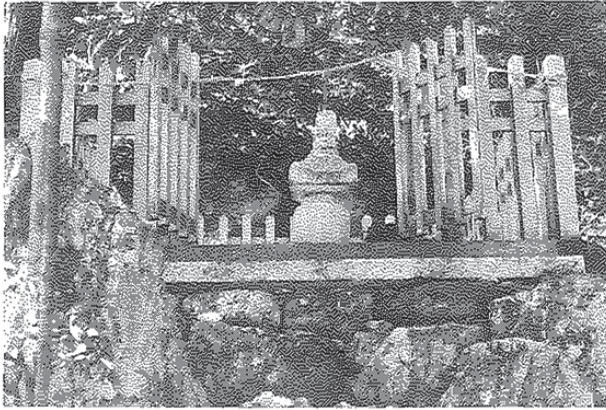
このように三島池は、母なるびわ湖に近くしかも隔離され、伊吹山系の地下水と清冽な姉川の伏流水を受けるといった環境のよいところに位置しています。また敦賀・伊吹・尾張を結ぶ線は生物分布境界のスタインガー線が通っているといわれ、生物の分布の上で特異な事象がいろいろ見つかっています。

## 三島池の水生生物

三島池はこの付近の大切な水田用水池になっていて、春四月になると水の出口を板で止めて貯水し満水にします。秋になると板をは



比夜叉の歌碑



比夜叉の墓

ずして放水し、深いところで水深50cmぐらいにします。

この池は、水が美しいことからいろいろな生物が生息しています。魚類はその代表ですが、永い間禁漁池になっていますので、大きいコイをはじめフナ・ナマズ・カワムツ・オイカワ・モロコ・ヨシノボリ・ドジョウ・ドンコなどがたくさん見られます。水生昆虫も多く、アメンボ・ミズスマシ・ゲンゴロウ・ガムシなどいろいろな種類をはじめ、タガメ・タイコウチも多く、トンボ・トビケラ・カゲロウなどの幼虫も多く棲んでいます。貝類ではタニシ・モノアラガイ・マシジミ・マツカサガイ・ササノハガイ・タガイなどが見られます。

水生植物は、ヒシが優占種で7月から10月にかけて池の全面を被い景観を悪くしていますが、ある程度は冬鳥の貴重な食物になっています。そのほか、ヒルムシロ・トチカガミなどの浮葉植物が池の周辺を占め、キンギョモ・クロモ・ミズユキノシタ・セキショウモなどの水中植物も生えています。挺水性植物の優占種はヨシで、これは水鳥の隠れ場としてなくては

ならない群落です。フトイ・マコモなども見られます。

周囲わずか1km足らずの池ですが、生物の種類数、個体数ともに豊富で、生物学上貴重な池になっています。

### 三島池の水鳥

この池は、はじめに述べましたように神の池として古くから崇められてきました。したがって池に棲む魚類をはじめ、飛来する水鳥なども700年余りずっと保護されて来ました。特に水鳥には大へん親しまれ、一年を通じて多種の水鳥が憩う楽園となりました。

ここに集まる水鳥は、カイツブリ・カルガモ・カワセミ・コサギが年中見られ、夏鳥のダイサギ・ゴイサギ・バン・冬鳥のマガモ・コガモ・ヒシクイ・ダイサギ（ダイサギには二亜種あって夏鳥はチュウダイサギ、冬鳥はダイサギとっています。種名は両者ともダイサギ）・そのほか時々姿を見せる留鳥のオシドリ、冬鳥のホシハジロ・キンクロハジロなど多種にのぼります。

以前は禁猟区といていたのを、法律がかわって鳥獣保護区という名に改められましたが、三島池周辺は県下唯一の特別鳥獣保護区に指定されています。



ヒシクイと中サギの群れ

冬の三島池と伊吹山 (前方は大東中学校)



(安田 正義氏写す)

### 三島池のマガモ

マガモ *Anas platyrhynchos* は冬鳥で、夏は主としてシベリア方面で生息し、繁殖します。10月になると日本に渡って来ますが、三島池には例年10月中旬から下旬にかけてやって来ます。北海道では平地でかなり繁殖していますが、本州以南では主として高山湖のみで繁殖しています。

三島池でもマガモが繁殖しているのではないかと以前からいわれていました。京都大学の故川村多実二先生たちが、しばしば三島池を調査されたようですが、遂に確認はできなかつたようでした。山東町立大東中学校科学クラブでは、2年間にわたって聞き込みや実地調査をしていましたが、1957年5月8日、やっと池で巣を営み産卵している現場を確認しました。しかしこの年は一夜の豪雨で巣と共に卵が水没し、ふ化寸前のひなが死んでしまいました。翌1958年、科学クラブでは人工浮巢<sup>うきす</sup>を考案し、卵を巢ごと移転することによって水没から守り、見事に自然繁殖を成功させました。それ以来、三島池及びその周辺で毎年産卵・ふ化することになり、マガモ自然繁殖南限地を確認する



マガモの卵

ことができ、生物分布上の貴重な発見となりました。県では1959年（昭和34年）2月10日、天然記念物に指定し、永く「マガモの自然繁殖南限地」として保護することになりました。

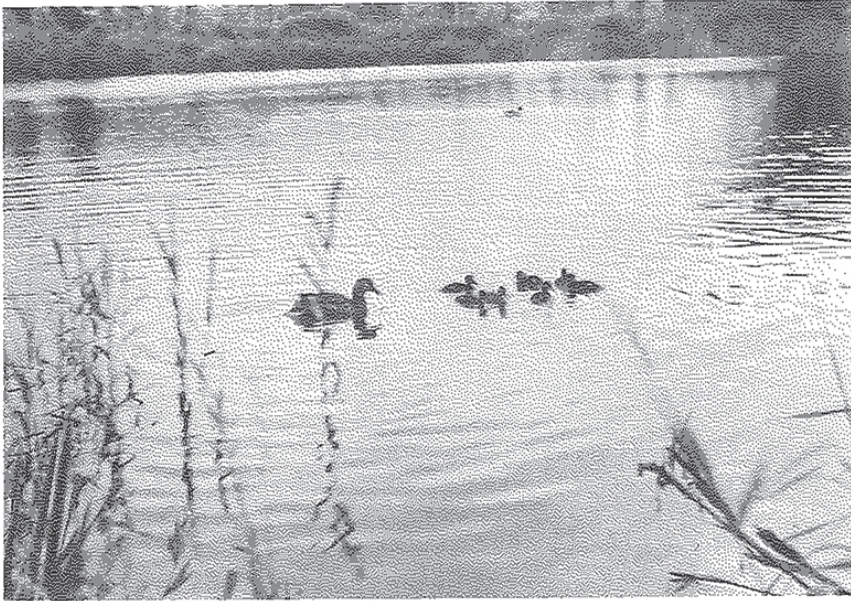
マガモは、三島池付近では普通5月中旬ごろ、直径30cmくらいの草や木の枝で作った巣に産卵しはじめます。メスの羽毛を巣の内側に敷きつめ、ニワトリの卵と同型同大の卵を毎日1個ずつ産みます。12～13個が限界のようですが、2～3個のうちに巣を人に発見されると卵を放棄して移転してしまいます。産卵後約4週間でふ化しますが、ヒナは生まれ

たときから立派な羽毛と丈夫な足を持ち、ふ化後まる1日もたつと地上をかけたたり、親鳥に連れられて水上を泳いだり、親鳥の背に乗ったりします。

マガモは転倒採食型の陸ガモで、首を水中に突っこみ尾を水上に出して水底の水草などを食べます。水中にもぐって魚を追ったり、貝をとったりはしない草食性の水鳥です。水中にもぐることでできるカモは海ガモとい



マガモの群れ



子ガモを連れ親ガモ

って魚貝類をとって食べます。びわ湖には海ガモが多く、内陸の池や沼には主として陸ガモが生活しています。三島池は陸ガモにとって深さといい、食物といい、条件が極めて適しているのです。また、池や沼にはマガモ型、コガモ型、カルガモ型の池がありますが、三島池は現在典型的なマガモ型の池といえます。

### むすび

昭和50年5月、本県で開催された全国植樹祭に両陛下が行幸啓された際、植樹祭の前日5月24日に両陛下が三島池へお立ち寄りになりました。そして新装成った三島池ビジターセンター（訪問者センター）をご視察になりました。私はそのときご説明申し上げる一人に選ばれ、約11分余りいろいろお話し申し上げ

げる光栄に浴しました。

その際、マガモが自然繁殖をしている土地を調べてみましたところ、意外にも高知県や鹿児島県でも自然繁殖しているというのです。最近では、その他の各地でも繁殖をしているようです。それは、最近マガモが鑑賞用・食肉用・剥製用に各地で飼育されるようになり、その一部が野外に逃げ出して繁殖をしているため、天然のマガモと区別ができなくなったものと思われま

す。こういうことは単にマガモだけでなく、他の多くの飼育鳥にも言えることで、探鳥会でも野生化した飼育鳥を多く見ることができます。

なお、三島池で水鳥を観察するには11月から12月にかけてが最もよい時期であると思われます。マガモが500羽近く見られますし、ガンで最大のヒシクイの群れが多いときは90羽くらいも見られ、全く壮観です。しかし、このヒシクイは飛来する場所、個体数が大へん少なくなり、いまでは貴重な冬鳥となりました。以上述べてきましたように、この池では1年を通じていろいろな水鳥が見られますが、降雪のため池が氷結して、水面が全くなくなる厳寒の季節だけは、水鳥が見られないこともあります。

(大東中学校 口分田政博氏提供)



行幸啓記念碑



三島池ビジターセンター